
赤に囚われし病室で

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤に囚われし病室で

【Nコード】

N6200C

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

熱中症が原因で、突然入院する事になった‘私’。病室と言う外と隔離された状況の中で、‘私’を取り巻く世界が変わってゆく。

第一話 赤い時計（前書き）

赤い腕時計。

私がこの病室で始めに拾ったもの。

赤い花びら。

私がこの病室で始めて嗅いだ香り。

錆びた鎖。

私がこの病室で始めて夢に見たもの。

赤い血。

私がこの病室で初めて流した自分の血。

第一話 赤い時計

目が覚めたとき、私は病室に居た。

此処のところ猛暑が続いたためなのか、今年は熱中症で倒れた人が多かった。

私もそのうちの一人である。

軽い脱水症状。

点滴ひとつで済む筈なのが何故か入院させられてしまった。

医者は一応検査をしておくと言っていたが、どうも腑に落ちない。

まあ、用心に越した事は無いので、良しとしよう。

4人部屋の病室なのだが、その病室には私一人しか居なかった。

他の3つのベットは空。何だか寂しい気分になる。

まあ、いい。3日もすれば退院できるのだから。

ふと、机の脇にある棚が目についた。上にはテレビが乗っている、

何てこと無い何処の病院にでもありそうな棚。

だけど私は異常なまでにそれが気になった。

棚というより中身が。

何か入っているのではないか？その期待と好奇心が私に棚を開けるという行動を勧めた。

私は自分の気持ちと思うままに棚を開けてみた。

キィ…

果たしてそこには私の予想通りに物があつた。

私はそれを手にとってみる。

時計だ。赤いベルトの。大きさからして女のものだろう。
以前入院していた人の忘れ物だろうか？

普通、彼氏から貰ったものを忘れていくか？

そう思い、私は可笑しい感覚に囚われた。

何故私は、その時計が彼氏からの貰い物だと決め付けているのだろう？

自分にそんな想像をさせたその時計が少しだけ気味悪くなった。
私はその時計を封印するかのようにもとの棚に戻した。

パタン…

棚は静かに、その時計を飲み込むように閉まった。

「稲見さん。夕食ですよー。」

看護婦が夕食を持って病室に入ってきた。

別に重症患者なわけでもないのに、病院食にお世話になるとは。

「稲見さん、これお薬です。食後に飲んでください。」

そう言われて渡されたのは2種類の錠剤だった。

私は何の不信感も抱かず、看護婦から薬を素直に受け取った。

看護婦が去った後、私は疑問に思ったのだ。

熱中症ごときで何故薬が必要なのか、と。

どうしても気になって、私はナースコールを押し、看護婦を呼んだ。
看護婦はすぐに駆けつけた。

「どうしましたか？」

私はこの2錠の薬が何なのかを訊ねた。

すると看護婦は少しだけ笑みを…と言うより愛想笑いを浮かべて

「栄養剤です。ビタミン不足との診断が出たもので。」

と言った。

確かに私は、偏った食事を今までしてきたため、ビタミンが不足しているのかもしれない。

私が礼を言つと看護婦は病室を出て行った。

第二話 赤い花

夜の病院というのは、どこか虚しいものだ。

広い部屋で私一人、ただでさえ虚しい気分になるというのに病院と
いうものは気味が悪いほど静かだ。

音といえば、時々看護婦が歩く音くらい。

それも静かなところに響き渡るので気味が悪い。

思えば私は人生で初めての入院経験だ。

生まれてこの方、病氣一つしたことがなかった。

だから、病院というものがこんなにも虚しい所なのだと今日初めて
分かった。

シンとした病室で何故か眠れず、ボーっと過ごしていると、小さな
音がしている事に気付いた。

チクタク、チクタク

それは紛れも無い時計の音。しかも壁にかかっている時計ではなく、
棚の中から聞こえてくる。

チクタク、チクタク

私はその音が恐くなり強く目を閉じた。

しかし、時計の音は耳についてしまい中々離れない。

チクタク、チクタク

私は我慢できずに目を開けた。

そこには、信じられない光景が広がっていた。

辺り一面赤い花が咲き乱れ、甘い香りを漂わせている。

そこは病室ではなく、もはや別の世界だった。

私は何処までも広がる赤い花の中に呆然と佇んでいた。

何処に行けば、この花畑が終わるのか予想もつかないほど花畑は永遠と続いている。

「フフ、こつちよ……」

不意に背後で誰かの声がした。

振り向いたが、そこには誰も居ない。

「こつちよ、こつち。」

今度は前方で。

私は、声の方向に向かって走り出した。

声の主は私を誘いながら不規則に動いていた。
相変わらず姿は見えない。

ふと、声が止んだ。

顔をあげると其処には一本の大きな木があった。

その木は、日本人にはとても馴染みの深い桜の大木だった。

「ここに連れてきてくれるって言ったよね？」

私のすぐ目の前に今まで見えなかった声の主が具現化した。
長い黒髪に、淡い薄紅色のワンピース。
その後姿は華奢な体つきで弱々しい印象を受けた。

「私ね、ずっと待ってたの。元気になったら此処に連れてきてくれるって言うから…」

手にはあの赤い腕時計が。

「ずっと、早く元気になろうって頑張ったわ。貴方がくれた腕時計、とっても嬉しかったし。だから、せめてものお礼に早く元気になって貴方を安心させようって。」

少女は私に背を向けたまま淡々と語る。

「でもね、違ってたんだね…」

そう言うなり、少女の肩が小刻みに震え出した。
静かな空間に少女がすすり泣く声だけが聞こえる。
私はどうして良いか分からず、とりあえず慰めてあげようと肩に手をかけようとした。
その時

「ドウシテ私ヲ…」

少女が私の腕を掴みゆっくりと振り向いた。
前髪のせいで口元しか見えなかったが、その口からは血が垂れていた。

薄紅色のワンピースも血に染まっていた。

「ひっ……!!」

私は思わず恐怖に戦^{おの}き、その手を振り払おうとした。
だがその手は離れない。

少女のものとは思えぬ力で私の腕を更に強く握ってくる。

「ドウシテ、センセ」

ぶわっ

突然、花嵐が起きた。

花は散り、私の視界を遮る。

私はその花びらのせいで呼吸をするのが精一杯だった。

段々と意識が遠のいてゆく。

そこで聞いた最後の声……

「ドウシテ私ヲ、センセイ……」

「……さん、稲見さん、稲見さん!!」

看護婦の呼ぶ声で私は目覚めた。

突然のことで看護婦は動揺していたようだが、目を覚ました私を見てホッと安堵したようだった。

「な、私はどうして？」

「覚えてないんですか？自分でナースコールを押した事を。駈け付

けたら貴方が痙攣を起こしてて…本当に何も覚えてないんですか？」
「どうやら私は無意識のうちにナースコールを押してしまっていたらしい。」

生々しい夢を見たくらいで、無意識のうちに人を呼ぶなんて私は何と女々しいのだろう。
急に自分が恥ずかしくなった。

「すみません、恐い夢を見たもので、魔まされてしまったみたいで。」

「では、持病とかではないんですね？」

「はい。」

看護婦はそれを聞くと会釈をして病室を静かに出て行った。

そう、あれは生々しくても所詮は夢だ。

初めての入院で神経質になっているのかもしれない。
腕時計一つで、あんな夢を見てしまうなんて。

私は何気なく少女に掴まれていた腕を見た。
其処には……

手跡がくつきりと。

握り締めていた拳をゆっくりとひらいた。

手の中には……

あの赤い花びらが。

甘い香りが病室に漂う。

そう、夢では、ない。

第三話 錆びた鎖

悪夢の晩が明けた今日、私の検査が行われた。

私としては早いところ検査を済ませ、この病院から出たかった。昨夜あんな体験をしてしまったのだから、そう思うのも当然だ。

しかし、私の期待とは裏腹にこの病院の院長であり、私の担当医はこう言った。

「昨夜の発作もありますし、もう少し此処に居た方がよさそうです。せめて検査の全ての結果が出るまでは。」

そうして私は病室に戻された。

相変わらず4人部屋なのに私しか居ない。

この病院は何かが変だ。

検査くらい通いで出来るだろうに、どうしてこのくらいで入院させたがるのか？

確か病院に運ばれたあの日、3日すれば退院できると言っていたが更に延長させられた。

一体どういふことなのだろう？この病院に対する不信感は募るばかりだ。

今日は時間があるので少し病院の中を探検してみる事にした。

もしかしたら、この病院に対する不信感が少しは晴れるかもしれない。

そんな期待を抱いて、色々な階を見て回ったのだが、やはり此処は他の病院と変わらない普通の病院だった。あからさまに可笑しい所は何一つ見当たらない。

私は全ての階を見て回った。いや、正確には全てではない。

地下室だけは、立ち入り禁止と書かれ、チェーンが張ってありどうしても近づけなかった。

しかし地下室にあるものといえば、きっと霊安室くらいだろう。私はそう思い、自分の病室に戻った。

シンと静まり返った病室のベッドに腰を下ろす。

もうすぐ夕食の時間だ。じきに看護婦が夕食を持ってくるのだろう。

7時になると同時に、病室の扉が開き看護婦が夕食を持ってきた。

「はい、稲見さん。夕食の時間ですよ。」

営業スマイルで私に夕食を渡す看護婦に、私はあることを頼んだ。看護婦はそれを快く了解し、数分後、私が頼んだものを持って戻ってきた。

そう、それは睡眠導入剤。

昨夜は中々寝付けずにいたが、これさえあれば悪夢から逃れられるだろう。

そんな事を考え、この薬を頼んだのだ。

私は寝る前にそれを飲み、深い眠りについた。

「水沢さん、せめて寝る時くらい時計を外したらどうです？」

「嫌よ、せっかく先生がくれた時計だもの。」

仲睦まじそうに会話をする男女の声が聞こえる。

男女と言つより、少年と少女の声と言つた方がより近いだろうか？

「今日は誕生日だったよね？ほら、これを君にあげるよ。」

少年が取り出したのは赤い花束。

少女の目がキラキラと輝く。

「わあ、素敵！こんな綺麗な花、今まで見たこと無いわ！！」

少年は彼女の喜ぶ顔を見て、優しい微笑を浮かべた。

「その花はね、僕の故郷にだけ咲く珍しい花なんだ。君に良く似合
うよ。」

「……………ありがとう。」

嬉しそうに頬を赤らめ花束をギュッと抱きしめる。

花の甘い香りが病室中に広がった。

「そうだ、君の病気が治って退院したら、その花が咲く丘に行つて
みないか？辺り一面その花が咲き乱れているんだよ？中心には桜の
大木があつてさ……………」

「連れてつてくれるの！？」

「うん、約束するよ。」

「約束だよ？先生……………」

ガチャ、ガチャガチャ

少女が目を覚ました所は見知らぬ場所だった。
金属でできてた台の上に鎖で体がしっかりと固定されている。

「先生！先生！助けて！！」

少女は助けを求め、鎖を何度も揺らした。

ガチャガチャガチャガチャ

「誰か居ないの？ねえ！誰か！！先生！！！！」

キィ

少女の悲痛な叫びに答えるかのように、部屋のドアが静かに開いた。
其処には彼女の思い人である先生と呼ばれるあの少年が立っていた。

「先生！！助けて！！これを外して！！」

悲鳴にも近い声で少女は懇願するが、少年は首を横に振った。
少女は涙を浮かべて少年を見る。

「どっついう…こと…？」

困惑気味の少女に少年は優しく微笑みかけた。

「君は僕のが好きかい？」

「ええ…好きよ…愛してるわ…」

「僕には君が必要なんだ」

「えっ……」

少年の言葉に少女は、先ほどとは違う意味での困惑した表情を見せた。

「それって……どういう…」

「言葉のとおりさ。僕には君が必要なんだ。君の健康な臓器が」

少年は注射をポケットから取り出した。それを見た途端、少女は怯えきった表情で震え出した。

「何も恐がる事は無いんだ。ほら麻酔もあるし痛くしないから。それに臓器を取り出されている君なんて誰にも見られたくない。大丈夫、実行するのは僕一人だから。」

「いや…来ないで……い…だ……」

「大丈夫、この針さえ刺されば、痛みも何も君は感じなくなるんだから!!」

「イヤーーーー!!!!」

ドウシテ…センセイ…ド…シテ…

少女を固定していた鎖が、赤く染まった……。

私は鉄の臭いで目が覚めた。

鉄の臭いは、どこか血の臭いに似ている。
でも、何故こんなにも鉄臭いんだ？

ペタッ

赤く染まった手が私の頬を撫でる。

「センセイ…才見舞イニ来テクレタンダネ……」

そこには血だらけの少女が立っていた。

最終話 赤い血

少女が優しく私の頬を撫でる。

私は、金縛り状態になり、何もする事が出来なかった。

この状況で何故か彼女のぬくもりを感じてさえいた。

「私、寂シカッタ…才見舞イニ誰モ来ナイカラ…デモヤット来テク
レタンダネ…」

少女は私を見つめて涙を流した。

多分、私を自分の思い人と勘違いしているのだろう。

涙は私のせいで流しているわけではないのに、泣いている彼女が愛しく感じられた。

人の涙を見るのは何十年ぶりだろうか？

人の感情に接するのは何時^{いつ}以来だろうか？

私の両親が他界してからというもの、私は人と深く付き合ったことが無かった。

もちろん独身だし、会社でも「窓際族」と呼ばれる存在である。

自分勝手な上司に、我儘な部下。人という生き物は何度も私を苛立たせた。

だから私は、人との付き合いを自ら避けて生きてきたのだ。

それなのに…こんな世の中に純粋な涙が残っていようとは、正直驚いた。

それが例え死人の涙であろうと美しいと感じずにはいらなかった。

「君は
」

私はやっこの思いで言葉を口にした。

「君はずっと寂しかったんだね？大切な人に裏切られて、今までずっと」

私は状態を起こし、彼女を抱きしめた。

彼女の思い人は自分ではない。しかし、こうすることで少しでも彼女を慰めてあげられるのなら、少しの間でも彼女の思い人の代わりになってあげようと思った。

彼女の細い腕が私の体にまわされる。

と、その時

「…嘘ダ」

少女が私の耳元でポツリと呟いた。

「嘘ダ！！」

二度目のその声は大きくなり、彼女が私の首を絞め始めた。

「先生ハ私ヲ裏切ッタ！コンナニ優シイハズガナイ！！」

「くっ…はあっ…」

息が出来ない。

彼女の力はどんどん強くなってゆく。

「才前ガ先生ノハズガナイ！何故コノ病室ニ入ッテキタ！！此処ハ私ト先生ダケノ場所ダ！ナノニ断リモナク…ドウシテ邪魔ヲスル！？消エ口！！」

意識が遠のいてゆく。

少女の顔が歪み、私の瞼もゆっくりと落ちていく。

「私ハ先生以外ハイライナイノニ……ドウシテ来テクレナイノ……」

彼女の寂しそうな声を聞いて、私の意識は途絶えた。

「先生、203号室の稲見さんが倒れました。」

落ち着いた声で看護婦の渡辺は稲見の主治医にそう告げた。
それを聞いた医者は口元を歪めニヤリと笑った。

「そろそろだと思っていたよ。薫、いつもどおりの状態だね？」

「ええ、脳死だと思いますよ。いつもどおり意識は回復しないでしょうね。」

二人は顔を見合わせてほくそ笑んだ。

そう、これはいつもどおりのこと。203号室に入院した患者は誰でも脳死状態になる。

そして、この病院からは生きては出られない。

「薫、カルテと調査書を。」

「はい、先生。」

ワザとらしく「先生」と呼び、渡辺は言われたものを渡した。

「うん、稲見惣一は確かに独身で天涯孤独なんだね。計画通りだ。それと」

医者は一呼吸置き、彼女の耳元で囁いた。

「今は誰も居ない。別に『先生』と呼ばなくてもいいんだぞ？」

その言葉を聞き、渡辺は微笑した。

「悪い人ね。孤立無縁の患者を昔の恋人を使って脳死にした挙句、臓器で一儲けするなんて。」

「人聞きの悪い事を言うなよ。一人の臓器で何人の人が助かると思ってるんだい？」

「あら？それは恰好の言い訳ね。」

「協力している君の立場はどうなんだい？」

「もう、意地悪ね。嫌な質問して。」

「悪い、悪い。金が入ったら何か買ってやるから許してくれよ。」

渡辺が出て行った後、院長室に一人残された稲見の主治医…杉村は、花瓶の花をじっと見詰めていた。

甘い香りのする赤い花。

203号室の少女が大好きだった赤い花。

「水沢正美…君には感謝しているよ。」

そう言いながら窓の外に視線を移す。

「君のおかげで、たくさんの臓器が手に入るのだから。」

彼の裏切りは、まだ続いていた……。

END

最終話 赤い血（後書き）

この物語はこれで終わりではありません。これではあまりに不親切すぎます。

この物語はあくまで稲見から見た物語。

それぞれの色を明らかにしない限り、この物語は終わらないのです。ということ、続編を予定しています。

次の作品も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6200c/>

赤に囚われし病室で

2010年10月9日20時27分発行